

# 都市と地方のエネルギー消費問題を端緒として人間が求める本質を探る

富樫豊主催による研究談話会における思想的交流を通じた人間存在の諸相に関する省察 (6)

## EXPLORING THE FUNDAMENTAL HUMAN DESIRES FROM THE POINT OF DEPARTURE OF URBAN-RURAL ENERGY CONSUMPTION DISPARITIES

Reflections on the Human Condition Through Dialogical Engagements with the Transdisciplinary Research Colloquium hosted by Dr. Yutaka Togashi, Part 6

岡田 成幸<sup>1</sup>, 川崎 一朗<sup>2</sup>

*Shigeyuki OKADA and Ichiro KAWASAKI*

<sup>1</sup>北海道大学名誉教授, 工学博士, 地震防災計画学

Hokkaido University, Professor Emeritus, Doctor of Engineering, Earthquake Protection Planning

<sup>2</sup>京都大学名誉教授, 理学博士, 地震学

Kyoto University, Professor Emeritus, Doctor of Science, Seismology

### 要約

本論文は研究談話会 E-mail 往復書簡シリーズの第6弾であり、都市と地方におけるエネルギー消費と二酸化炭素排出の格差を手がかりに、人間が求める本質的価値を思想的に探究するものである。特に、首都圏における過剰な利便性・快適性が一人あたりのCO<sub>2</sub>排出量を増大させている可能性に着目し、地方との比較を通じて「利便性」と「幸福」の関係を問い直す。さらに、功利主義的政策が地域間格差を助長し、地方の疲弊や防災・環境問題への無関心を招いている現状を批判的に考察する。人間の本質に関する省察として、自己領域の拡張欲求や科学依存の傾向、さらには多様性と変化への適応力が人類の進化を支えてきたことを論じ、現代社会における倫理的方向性の必要性を提起する。

**Keywords**: Regional Disparity, Excessive Convenience, Per Capita CO<sub>2</sub> Emissions, Utilitarianism, Expansion of Personal Domain

地域間格差, 過剰な利便性, 一人あたり二酸化炭素排出量, 功利主義, 自己領域の拡張

### I. 二酸化炭素の過剰排出源を探る

#### ■1-1. 川崎一朗→岡田:CO<sub>2</sub>の排出源は日常生活の過剰な利便性にあり

2025年4月24日(木) 18:13

富樫様 cc:岡田様

今日は久しぶりに星野研究会に顔を出したのですが、他の用があったのでできるのいいところで中座しました。

ところで、私は、日本において二酸化炭素の最大の過剰排出源は、「首都圏の過剰な利便性、過剰な快適さ」を作り出した累積公共投資だと思っています。

それを忘れて、人口が減り、シャッター商店が増えて悩んでいる地方に向かって、「みんなで二酸化炭素排出量を減らそうよ」と呼びかけるのは迷惑なだけです。

北海道に住んでいる岡田さんもそう思いませんか？

東京都が計画していると報じられた、羽田と東京駅を直接結ぶ「都心部・臨海地域地下鉄」などは、「過剰な利便性」の最たるものです。

6月はこの様なことも話すつもりです。

川崎

#### ■1-2. 岡田→川崎:もうひとつの見方

2025年4月24日(木) 22:55

川崎先生

メールありがとうございます。

都市と地方の格差は広がる一方で、日本の国力低下が明らかとなってきたことから、国も一極集中を堂々と是として国策にしようとしています。悪名高い全総の7次計画が、スーパーメガリージョン構想で、東京から大阪までのエリアに地方から略奪した資本(人材も含む)を投入して、日本の魅力として世界に売り込もうとしています。石破さんが地方創生をうたっていますが、どこまで本気なのか、本気であっても経済界の力にどこまで対抗できるのか、疑問です。二酸化炭素排出量は人口に比例しますので、川崎先生のおっしゃる通りだと思います。

その一方で、羽田アクセス線は、東京を利用する人にとっては便利な交通システムなのでしょう。東京人のためというより、東京をよりよく使う地方の民にこそ利便性が高まるという意見もあります。しかしこの意見も、東京の吸引力を高めるだけ、という見方になんと答えるのでしょうか。東京だけ便利にして、そこに首都直下地震が来たら、日本壊滅ですね。首都圏震災後は、その復興に地方の全勢力を首都圏に注ぎ込むのでしょうか。地方の切り捨てに拍車がかかります。

川崎先生の発表を楽しみにしています。

岡田成幸

### II. 一人あたりの排出量が過剰利便性の指標にならないか

## ■2-1. 川崎→岡田:住民一人あたりのCO<sup>2</sup>排出量について

2025年4月26日(土) 8:21

岡田様

レスポンス、まことにありがとうございます。

ちょっと誤解されてしまったようです。

私が言いたいことは、「首都圏の過度な利便性、過度な快適性は、日本の平均よりも大きな住民一人当たりの累積二酸化炭素排出量によって可能になっているのではないか」ということです。如何でしょうか。

川崎一朗

## ■2-2. 岡田→川崎:一人あたりとマスあたりCO<sup>2</sup>の影響度の違い

2025年4月26日(土) 9:55

川崎先生

メールでの再質問、ありがとうございます。以下の文では「エネルギー消費=二酸化炭素排出」と読み替えてください。

一人当たりということになると、マスの効果も大きいのではないかと思います。国交省がよく出すデータとして、都道府県別一人当たりの道路舗装距離というのがあります。北海道は道路の整備が遅れているという住民の意見を封じ込めるために出してくる資料ですが、北海道の一人当たりの距離は東京都の数値よりはるかに長く、それをもって北海道の開発は遅れていないと言いたいようです。

人口で割り算すると、東京都は殆んどの数値が小さくなります。効率という点では人口集中が正解となってしまいます。

しかし集中は、人間の欲望も高める効果があると思います。田舎では考えられない消費行動を煽ります。それにより、一人当たりの総合消費エネルギーは田舎よりも大きくなると私は思います。

1人の人間が生きていくのに必要な行為にかかる必要エネルギー量で比較するとマスの効果により、一人当たりでは「田舎」>「都市」の関係になると思います。しかし田舎の生活と都市の生活の営みの質の違いにより、1人の人間が人生で消費する総エネルギー量を一人当たりで算出するならば、「田舎<<都市」の大小関係になると思います。種々の快適さ(利便性や欲望も含む)を満たし、そして様々な文化や教育に触れるチャンスが多いのが都市の生活だと思います。これを余計なエネルギー消費と捉えるか人生謳歌に必要な選択肢と捉えるかは、価値観に関わるので正否の判断は難しいと思います。

個人的には私は川崎先生に同意です。その前提で、前メールでコメントさせて頂きました。都市にはマス効果による一人当たりエネルギーで見た効率性とは逆に、都市にはマスによる悪影響として田舎のエネルギー収奪(都市への吸引効果)も際立つということも見逃してはいけないのではないかと、いうことを言いたかったのです。

岡田

## ■2-3. 川崎→岡田:首都圏の整備を含めたCO<sup>2</sup>排出量について

2025年4月26日(土) 18:25

岡田様

岡田さんにお手数をおかけしているのはもうしわけ無いのですが、もう1点、忘れていました。

宇沢弘文じゃないですが、過剰な利便性と快適さを作り出している交通網・道路網の整備、駅ビルなどのハードの整備、周辺の道路網の整備などのために排

出されて来た累積二酸化炭素も含めて、という積もりでした。すると、累積二酸化炭素排出量は、富山市民一人より、首都圏住民一人の方が遙かに大きいと思うのです。

結局、岡田さんがメールに書かれたことは、とどのつまり私と同じ事を言っていることになると思いますが。

川崎

## ■2-4. 岡田→川崎:一人あたり換算はマス効果で薄められる

2025年4月26日(土) 20:58

川崎先生

個人的には川崎先生に同意です。

ただ気になるのは、東京で二酸化炭素を排出しているのは、東京都民のみではなく地方からの出張ビジネスマンや観光客、外国人などの都民以外も東京で二酸化炭素排出に寄与していると思うわけです。東京でタクシー使うのは都民よりも都外の人であり、ホテルでエアコン使うのも、都外の人。東京都民の排出量を都民全人口で割り算すると、一人当たり換算は全てにおいて小さな数値になってしまう。マスの効果です。都市にいることによる遊興エネルギーが田舎よりも多いのは確かだと思います。東京で使う一人当たりの排出量(すなわち東京都民だけではなく、地方人も含め東京都で排出する量を一人当たり換算する量)は多いと思いますが、首都圏住民と地方都市住民との1人当たり換算となると、どうなるかよくわかりません。一人当たりで評価するのはそれなりに議論を深めるとは思いますが、都市が排出する総量で議論する方が単純で分かりやすいと思います。

岡田

## ■2-5. 岡田→川崎:マス効果(岡田■2-2.)の補足

2025年4月27日(土) 11:30

川崎先生

昨日、川崎先生の再質問への回答をお送りしましたが、言葉足らずだったので追加します。

先生の質問は、住民一人あたりの二酸化炭素排出量の大小を、ハード整備も含めて考えるとどうなのか、ということでした。

私は、二酸化炭素排出問題は「ハード整備+人間の営み」のトータルとして考えるべきと言うことに意識がいていたため、ハード整備のことには触れず、人間の営みで排出される二酸化炭素量について、コメントしました。そこでの要点は、誰が(都民なのか地方住民なのか)ではなく、どこで(東京都なのか地方都市なのか)が重要ではないかと言うことです。

ハード整備に係る二酸化炭素排出を住民一人あたりに換算する、一つの例を示します。

2004年の講演で使った資料ですので、古いものですが、基本は変わっていないと思います。

役人がよく使う統計資料の過誤を狙ったプレゼンです。人口(千人)当たりの道路延長距離を長い順に都道府県別に並べたものです。

島根県 22.7km、  
長野県 22.5km・・・  
北海道 15.2km・・・  
神奈川県 2.9km、  
大阪府 2.0km、

東京都 2.0km。

これを提示して、役人は、「地方の道路整備事業が遅れているのは誤解である…」と言いたいのでしょう。

一例ですが、公共投資により人口一人あたりで排出される二酸化炭素量も同様の結果です。道路総延長距離(二酸化炭素総排出量)に換算するには、上記値に人口を積算すれば良いのですから、順番は逆転します。

人口一人あたりに換算することで、都市への集中投資をごまかす手段として行政が使う手法です。

道路整備によるその利便性効果は、上記に示したような距離を人口で割るのではなく、その整備事業により距離移動が今までの交通移動に要する時間をどれだけ短縮できたのかで計測すべきものだと思いますし、その整備事業により排出される二酸化炭素の影響は、そのプロジェクトで排出される総量で図られるべきものだと思うのですが、いかがでしょうか。人口一人あたりで計算したとしても、住民一人がそれだけの量を排出しているわけではないのですから。公共事業は、一人の人間に対しての損益で計算すべきものではなく、社会としての損益で計るべきものだと思います。

以上、補足でした。

岡田

### Ⅲ. 人類が求める本質的なモノ

#### ■3-1. 川崎→岡田:川崎発表(6月例会)の資料

2025年5月1日(木) 10:57

富樫様 岡田様

自分の頭の中を ppt(pdf)に整理してみました。

感覚的に思ったことを書いていただけですので、間違ったことを言っているかも知れませんが、話題提起ぐらいにはなるかと思っています。

川崎一朗

川崎先生からは 2025 年 6 月例会(川崎先生発表)の資料を送って頂きました。

#### ■3-2. 岡田→川崎:功利主義が地域間格差を広げているということ

2025年5月2日(金) 12:38

川崎先生

資料を有り難うございます。

当方、視力障害を起し治療中です。そのため、返信が遅れますことご了承願います。

川崎先生の主張には、これまでも申しているとおりの同意であり、今回出された資料も私のこれまでの主張にもほぼ合っています。

違いをあえて申し上げるならば、私の4月27日送付のメールにも書かせてもらいましたが、「公共施設・サービス」投資は「どこに住んでいる誰のため(東京都民のため)」に言うことではなく、「それを利用する人のため」の投資であると言うことだと思うのです。【東京都民への投資ではなく、東京への投資】だと言うことです。その結果、東京への人口集中に拍車がかかり、地方の資源(人口を含む)の東京への吸引効果で地方が益々疲弊していく構造を作り上げている、ここが問題なのだと思います。二酸化炭素排出量にしても同じです。なので、住民人口で割り算し、「一人あたりに参加排出量」を計算すると、大都市ほど「一人あたり

二酸化炭素排出量」が少なくなる結果となり、感覚とのずれを生じているのだと思います。仮に一人あたりの二酸化炭素排出量を川崎先生の思惑どおりに計算しようとするなら、都道府県別の排出量を日本の全人口で割り、それを表示すれば良いのだと思います。地域別の総排出量と何ら違いのない傾向を示す数字ですが、「一人あたり」にこだわるのでしたら、このくらいはどこでしょうか。

川崎先生が指摘されている過度の「利便性」「快適性」が一人あたりの二酸化炭素排出量を増加させているに違いない、という指摘は尤もなご意見です。私も4月26日送付のメールに、そのことを記載させていただいております。それを「一人あたりの客観的数字」に算出する方法が難しいのです。一人ひとりの日常の行為をフォローし、どれだけのイベント(様々な行為のこと)を消費したかを地域比較すれば良いのでしょうか。しかし、たとえばわかりやすい例として「ある有名人のパフォーマンス鑑賞」を考えてみても、都会の人がその移動に公共交通を使えば利用者一人あたりのエネルギーは、公共交通のない地方都市で自家用自動車を使っただけの移動エネルギーよりも小さくなるでしょう、公共施設整備に掛かるエネルギーや施設メンテナンスに掛かる総エネルギーも換算し、自家用車1台にかかる製造コストなどの総エネルギー比較をすると、また違った答えとなるかもしれませんが、一般的な計算方法では一つの行為に対するエネルギー消費は都会の方が「マス(集中)の効果」により小さくなるのが普通だと思います(田舎の集落をまとめるコンパクトシティも同様の発想です。インフラを集中させ、縮小人口の継続性をインフラコスト削減から担保しようというものです)。では、地方都市でそのようなパフォーマンス鑑賞がおこなわれるかといえば、多くはないでしょう。つまりは地方都市にはそのような魅力的なものが少ないのです。

結果として、地方の諸活動は縮減しエネルギー消費は少なくなる。これが川崎先生の言われる「過度な利便性・快適性」の「二酸化炭素排出の正体」なのだと思います。しかし私は思うのですが、文化・教育イベントは過度な快適性ではなく、日本人の文化レベル・リテラシー向上にとって必要なことであるし、その魅力に惹きつけられることは悪いことではないと思います。問題は、その機会に触れる地域間格差にあると思います。

このような【地域間格差】を、国は政策として推し進めようとしている。スーパーメガリージョン構想が正にそれです。人口の一極集中で、この地域の魅力をグローバル的に高め、日本のグローバルプレゼンスを高めようとしている。その副作用として「地域消滅」がまっているのに。これは間違った政策だと、説明されれば誰もが理解できることだと思います。しかしここで困ったことが生じます。集中は都市の魅力を高めることは事実だと言うこと。そして、その恩恵にあずかっているのは大多数の日本人だと言うこと。そして、政策としての正解は、ベンサム功利主義に則っていると言うこと。すなわち、「最大多数の最大幸福」が政策の目標値として反対できないと言うこと。

私は防災の立場から、弱者優先を掲げていますが、防災政策は残念ながら言ってるほどには、国の優先政策ではありません。地球環境問題も同じです。前回の星野委員会(2025年4月24日リモート開催)で最後に私が申し上げたのもそのことなのですが、「一人の強権的リーダーのイデオロギーが世界の動きを決定づけてしまう社会がやってきている。」。それまで活発であった世界的な環境活動が一人の米国大統領の誕生により、社会的話題性が急速に陰ってきたように感じます。

この流れにどう筆をさすべきか、考えどころだと思います。

岡田成幸

#### ■3-3. 川崎→岡田:多摩地域と東京都の住民生活から感じたこと

2025年5月2日(金) 15:47

岡田様

いつもながら岡田さんの思慮深さに敬服しています。自分の頭の中が整理できないときには岡田さんにメールを送って迷惑をおかけしています。

一点、微修正させてください。私の娘は多摩地域に家を建てた典型的な中産階級の都民で、贅沢もせず慎ましく普通の(どちらかといえばケチくさい)生活をしています。私が「首都圏住民の生活の過度な利便性、過度な快適性」と思ったのは、その生活を見ていて感じたことなのです。何故そう思うのかを説明するのは難しいし、娘夫婦も「自分達は特に利便的で快適な生活な生活なんかしていない。富山よりちょっと便利かもしれないけれど」と不思議そうな顔をするでしょうけれど。

もう一点、私が「一人当たり」にこだわるのは、星野委員会の東京に住む常連の先生方が、溢れるような善意にもかかわらず、「自分事意識」に欠けているような気がするからなのです。

川崎

### ■3-4. 岡田→川崎:自分の関心域を拡大するホルモンスイッチ

2025年5月2日(金) 17:48

川崎先生

メール有り難うございます。

また、過分なお言葉もいただき、恐縮です。

メールを拝読し、川崎先生の根源的な問題意識に触れたような気がする。

2点、ご説明がありました。どちらも「今、当事者ご自身が置かれている立場の外で、当事者たちは世の中を見つめている」と言うことに対する川崎先生の不信感のかな、と思いました。別の言い方をすれば、『その方々が仮に社会の課題に触れたとしても、「自分事」としてその問題に立ち向かってはいないのではないか』と川崎先生は思われているのかな、と思った次第です。

人があることに関心を持つこと、自分事として関心を持つことは、人の本質に関わる実は大変に難しい行為なのだと思います。

医者の説明なのですが、人間もっている男性ホルモンと女性ホルモンには役割があり、男性ホルモンは「未来に興味を持たせるホルモン」であり、女性ホルモンは「自分の周囲に関心を持たせるホルモン」だということです。「男性は現実を見ずに夢ばかり追っている」と言われる人が多いし、「女性は明日のことよりも周りのことにとらわれがちだ」と言われる人が多いかもしれません。私はこの説明を聞いて、人間という生きものは時間的(男性ホルモンによる)にも空間的(女性ホルモンによる)にも、自分の領域を広げようというふうに行動するものなのだ、「関心」はそのために働くスイッチなのだという風に理解し納得しました。今、自分が立っている領域を広げようとするのが、人間本来のホルモンの働きなのだというように理解すれば、人類の進歩・進化は人間の本質だと言えます。なぜこのようなことを言うかという、自分の領域内にすでにあるものには、あまり関心が向かないということなのではないか、ということです。一度獲得してしまった利便性や快適性は、それほどの利便性や快適性とは感じない、一度克服してしまったと思っているリスクには、自分事(自分の領域内)のリスクとは思わない。これが人間の本質なのかもしれないな、と思うのです。川崎先生が触れられた指摘に、このような回答は相応しくないでしょうか。

もう一点、これは川崎先生のご質問にはなかったことなのですが(むしろ星野研究会で話題にすべきことかもしれませんが)、人間の科学依存性は否定でき

ないと言うことについて、上記のことに関連し少しだけ私見を述べさせていただきます。唐突ですが、「怖い人」というのはどういう人かを考えたことはありますか。内田樹の著書の中にあつたと思うのですが、怖い人とは合理的思考ができない人だということです。

確かに、合理的な思考ができない人は、次の行動の予測が付かない人であり、何をすべきか分からない人です。こういう人に怖さを感じます。逆に合理的で次の行動が分かりやすい人は安心できる人です。内田樹は政治家になぞらえてこのような発言をしたかに思います。「怖い政治家は合理的思考ができない政治家であり、何をすべきか分からない政治家だ。合理的な思考ができる政治家は行動が分かりやすいので世間から軽く見られる政治家だ。(内田樹は合理的思考ができない政治家は、本当は悪い政治家なのに、怖い人と言うことでそこに威厳ありと誤解し、世間的には評価が高く、本当は合理的思考ができる政治家は良い政治家なのに分かりやすいために世間的评价は低い、ということをやったのだと思います)」。こう考えると、政治家の評価は別として人間は安心を求めるわけで、合理的に次の予測ができるのは科学です。ある条件の範囲内であれば科学で次の状況予測が可能です。そこに安心を求めるのが人間であり、よって科学で世の中を理解しようと、人間の関心の方向が向くのが、自然の潮流というものなのではないか。これも人間の領域を広げることに躍起となる人間の本質なのかなと思ったりもします。人間は、一度得た力は手放さない、倫理的に許されないとしても。だから、その力の使い道を正道に向ける箍(たが)ーこれを哲学と言って良いのかどうか分かりませんがーが必要なのだと思います(哲学とは、人間の本質を探る学問であり、倫理学や宗教学とは異なる分野です)。

いつもメールが長くなり恐縮です。川崎先生のメールはいつも思索のスイッチを刺激してくれます。メールを打ちながら思いつくことも多いです。

いつも有り難うございます。

岡田成幸

### ■3-5. 川崎→岡田:地球温暖化と南北問題

2025年5月5日(月) 7:41

岡田様

微補足をさせていただきます。

私は決して不信感など持っていないです。参加者の先生方を信頼し、尊敬しています。

私も岡田さん同様に南北問題こそが核心的な問題と思っています。ただ、温暖化にプレーキをかけたいという議論は技術論に走りがちです。

でも、いつか婉曲に南北問題を持ち出したら軽く聞き流されてしまったので、別の素材が無いかなあと思っていましたら、多摩地域の娘のところに滞在中にハッとすることがあったので、首都圏住民のひとりあたり二酸化炭素排出量という素材でタオルを投げる事が出来るかなと思った次第です。考えて見れば、日本としては諸問題に関連した最重要課題ですね。

DNAから見た人類の歴史の本で、原人類は特徴は「旅をする」ことだと言いたいと言いたかのように書いてあったのを記憶しています。動物でも鳥でも、寒気には南に移動し、温暖期には北に移動してきました。でも、人類だけが、出アフリカの後、中近東から、ひたすら、シベリアから極域に移動してきました。「旅をする人」としか言い様がないというのです。

人類の雄が、どこでどのようにして「未来に興味を持たせるホルモン」を獲得したのか不思議です。

## ■3-6. 岡田→川崎:人間の本质は多様性

2025年5月5日(月) 11:37

川崎先生

補足をしっかりと、受け止めさせていただきます。

技術論は、マニアックな話も伺えるので、専門家の技術論はそれなりに面白いのですが、人類や地球に関する大きな歴史観は周辺の学会ではあまり論じられてはいません。

その意味で、当研究談話会や星野委員会は、希有で貴重な存在だと思います。

川崎先生が当研究談話会で話題にされたこと、皆さん軽く流してはいないと思います(メール文には反して、川崎先生も本当は感づいていると思います)。重く受け止め、熟成させているのだと思います。

私も、これまで考えていなかった多くの素材が、色々な分野の先生方から提示され、その場でどう咀嚼して良いのか、戸惑うことがしばしばです

有難いことに、富樫先生が研究談話会の動画記録を送ってくれますので、それを見直すことで多くの気づきを体験させてもらっています。

ただ、それに多く反応できているかというと、自己の体力や障害があり、アウトプットできていない点は反省しなければいけないと思っています。

川崎先生からの本メールに、「人類は旅をする人」という見解が紹介されました。最近のNHKで放送されていたことなのですが、人類が樹上から草原に降りてきたのはアフリカ大陸東南部の果実の少ないサバンナ地帯であり、餌を狩る必要に迫られた。この弱小動物が生き抜く術は、体毛を失ったことだとの説明がありました。体毛を失い汗をかくことができるようになった人類は体温の調節(冷却作用)が容易となり、集団で長距離移動が可能となり、餌となる動物が弱るまで追いかけることができ弱小でも生き抜くことができるようになった、というのがこの長距離移動能力が旅をする能力、地球のあらゆる場所へ移動し繁殖することができるようになったという説明でした。

分かりやすい説明ではありますが、私は人類を特徴付ける一要因であるというふうに思います。色々な説が出てきています。共感力説・言語説・器用な親指説……、どれもが合わさって現代の人類を形成したのだと思います。その中の一つに、前メールでお話した「自己領域を拡張しようとする男性・女性ホルモン」の存在もあるのかなと言うことです。NHKの新シリーズ、人体3で放送されていましたが、一人の人間は生まれてくるときに少なくとも70個のDNAが、親のDNAとは異なる変化をしているそうです。それが新人類(スーパーヒューマン)につながることもあり得るという話でした。今の地球環境において、それが優位に働くDNAであれば受け継がれていくのでしょうか。この変化が重要なのであり、多様性を生み出す原動力なのだと思います。生物全体にとっての基本特性が「変化(進歩ではなく進化という意味での変化)」なのでしょうが、人類は他生物よりも、「変化」に敏感に反応してきた生物ではないかと思います。トマス・クーンが言うところの「パラダイムシフト」がもたらした科学革命は「前科学論」を否定した「新科学論」への「変化」によりもたらされたものですし、それをより大きく捉えたハバリが言うところの「認知革命-農業革命-科学革命」による人類進化も「意識の変化」により人類が獲得してきた能力と捉えられます。

人類の特徴は多様性と、私は、ざっくりと捉えています。むしろ、多様性を否定したら人類は絶滅ではないかと思っています。思想の多様性・政治力学の多様性……これらの多様性を否定する強権力が怖いなど、思うこの頃です。

[了]